

ストライクウィッチーズ ～孤独な氷結王～

shimitol8

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔力を持って生まれてきた少年

魔力を持って生まれたが故に

過酷な戦場を生き抜き

裏切りと人殺しの烙印を押された

1944年、少年は501統合戦闘航空団に転属が決まった

少年は何をもって、何のために、何故戦うのか……

新たな物語が始まる

☆☆☆☆

息抜き程度で書いています。苦手な人はブラウザバック推奨
非ログインユーザーでも感想は可能です
タグは増える可能性あり

目次

プロローグ	1
第1話	6

魔女達はそう言っただけで思い思いの武器を手に取り、それら全てで攻撃してきた。

☆☆☆

そこで少年は目を覚ました。

「……………っ！ハア、ハア、ハア……………クツソ、昼寝ぐらいは勘弁してくれよな」

少年は大量の寝汗を拭い頭をグシャグシャと搔いていた。

外から「ボオー」という汽笛音が聞こえると、部屋が動き始めた。部屋の外には海が広がっている。そこは船、詳しく言うと正規空母赤城の一室なのだ。

ドンドン！と扉をノックする音が聞こえると、外から女性と思われる声が聞こえた。

「リュウ！匙龍さじりゅうのすけ之介少尉いるのか！」

「は、はい！坂本美緒さかもとみお少佐！」

少年は外に居る女性と思われる声の主から、少年の事を「匙龍之介」と呼び、サジも声の主を「坂本美緒」と呼んだ。

「お前に会わせたい者が居る、すぐに部屋から出てこい」

「了解しました」

サジはそう言っただけですぐに身だしなみを、右手だけで直すと、すぐさま部屋を出た。

部屋を出ると目の前に眼帯を付けた黒髪で後ろで一つ括りにした女性が立っていた。

「匙龍之介少尉参りました。坂本少佐、それで自分に会わせたい人物とは？」

「ああ、会わせたいのはこいつだ。宮藤、自己紹介をしろ」

「は、はい！」

坂本の指示で坂本の隣に居た小さな女の子が礼をして自己紹介を始めた。

「み、宮藤^{みやふじよし}芳佳です。よろしくお願ひします」

「匙龍之介少尉だ、よろしく頼む。それで少佐もしや彼女を軍に？」

「そう誘っているのだが、戦争は嫌いだと断られてしまつてな、あつはつはつは！」

坂本は腰に手を当て豪快に笑っていた。というか、笑つてごまかしたと言つたほうが良いのかもしれない。

「では、なぜ彼女をこの赤城に？この船はブリタニアに向かっているはずでは？」

「ブリタニアにもしかしたら私のお父さんを探していて…それで、もしかしたらブリタニアにお父さんの情報があるかもしれないのでそれで……」

サジは「そうか……」と言つて右手を顎に当て考えてみた。

「もしや君の父親は宮藤博士か？」

「そうです、匙さんも父を知っているんですか!？」

「いや、悪いが直接は会つたことはない。名前と研究していた俺たち魔法使いが、ネウロイと戦うための兵器「ストライカーユニット」を作ってくれたことぐらいだ」

サジがそう言うのと宮藤はキョトンとした不思議な顔をしていた。当然である、先ほど

第1話

坂本から匙の正体を聞いた宮藤は、口を大きく開けて驚いていた。坂本はそんな宮藤を見て豪快に笑い、サジはそんな2人を見て頭を抱えていた。

「何だ宮藤、本当に知らなかったのか？ 孤独な氷結王の通称を持つ魔法使いだぞ」
ウイザード

「少佐、その通称よりも「魔女殺し」の方が有名だと思えますよ」

匙がそう言つて指摘すると、坂本は少しムツとしたどこか悲しい顔をした。

「それでは少佐自分はこれにて失礼します」

匙は坂本に礼をするとその場から立ち去った。

「坂本さん、一つ質問しても良いですか？」

「ん？ あ、ああなんだ？ 宮藤」

宮藤は去つていく匙の背を見ながら坂本に聞いた。

「もしかして匙さんの左腕はやっぱり戦争で？」

そう、匙には左腕が無いのだ。ずっと左腕の袖だけが風で靡かせていた。

「ああ、とあるネウロイとの戦闘で無くしたらしい。訓練や出撃、それから食事等では義手を付けているようだ」

「そうなんですか………」

宮藤はどこかバツの悪そうな顔をして答えた。

宮藤芳佳という人間は、もともと戦争や戦場が嫌いだ。けれどもこんな風に、間近で戦争によって傷ついた人間を見るのは初めてで、宮藤はこれから自分に何が出来るのかそう考えるキツカケの一つでもあった。

「それじゃあ宮藤、この赤城の船内を案内しよう。ついて来い」

「は、はい！」

☆☆☆

匙は坂本たちと別れると格納庫に向かった。

だが、匙の話をする前にまずはこの世界について話さなければなるまい。

1939年、突如異形の形をした怪異が出現した。怪異は出現すると、様々な町、村、草むら、山々が焼き尽くされ様々な国や地域が侵略され、人々は故郷を追われた。後にこれらの怪異を「ネウロイ」と命名された。

だが、人間たちも黙ってはいなかった。それは、科学と魔法が融合し対ネウロイ用に開発された魔女達の新しい箒。その名も「ストライカーユニット」これを両足に装着することにより魔女達は空を自由に飛び、武器を取り己が魔法を磨きネウロイ達を倒している。

だが、通常の魔女は魔法力を持つ女性がなるもの。今までそれ以外の前例が存在しない。

そう、匙龍之介という人間はこの世界では異常な存在なのだ………

☆☆☆

格納庫に着いた匙は自身の機体をそつと撫でた。だが、匙が触っていたのはストライカーユニットではなく攻撃機が一機、格納されていた。

「匙少尉、こんなところでどうされましたか？」

匙に話しかけてきたのは、この赤城の整備兵だった。

「ああ、特に理由はないんだがな。今はやる事も無いからこいつを見に来たんだよ」

匙はそう言いながら今まで触っていた攻撃機をコンコンと叩きながら言った。

「そうでしたか、それにしても本当に良い機体ですよねこの一式陸攻は」

「まあな、こいつには何度も助けられたからな」

正式名称 宮菱重工業一式陸上攻撃機二二型G4M1（乗員1名用改造機）通称一式陸攻。

通常、乗員7名用の陸上攻撃機。それをサジ専用の機体に改造された代物だ。

操縦席には操縦桿等は無くストライカーユニットの要領で、足ではなく腕を挿入し

魔力を流し操縦する。

武装は爆装が搭載されており、60kg爆弾12発、250kg爆弾4発、500kg又は800kg爆弾1発計17発が搭載されている。また、きちんと機銃も搭載されており、7.7mm旋回機銃3挺（前方・側方）20mm旋回機銃2挺（上方・尾部）計5挺が搭載された機体だ。これら全ては操縦席にて操作可能に改造されてはいるが、それでも一人なので全てを同時には操作は不可能だが、固有魔法を用いて足りない部分を補いながら戦闘を行っている。

「ところで少尉、無礼ながら一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、言ってみろ」

「少尉は何故、ストライカーユニットをご使用なされないのですか？」

「……………お前は、本当の恐怖を知っているか？」

「え？」

整備兵は分からないという顔をした。質問に質問で返され、彼にとっては意味不明の質問、彼は深く考えようとするが一向に答えは出なかった。

「いや、構わない気にするな。その答えが分からない限りお前に何を言っても俺の気持ちには分からない」

そう言つて匙は格納庫を後にした。

☆☆☆

赤城が扶桑を出港してからしばらくたったある日

宮藤が船内の洗濯に料理、そして甲板の掃除まで行っていた。

「少佐、彼女は何を？」

匙は坂本に会おうと現在の宮藤の様子について聞いた。宮藤は今、デッキブラシを持ち甲板の掃除を行っていた。

「視ての通り掃除だ」

「いえそうではなく、なぜ彼女は掃除をしているのですか？少佐の入れ知恵ですか？」

「いや、あいつ自身の意志だ。自分だけがただじつとしているのが嫌なのだろう」

「そうですか……」

匙はただじつと宮藤を見ていた。宮藤は見られているとは知らず、楽しみにブラシで甲板を磨いていた。

すると、トントンと坂本がサジを呼んだ。匙が「？」とした顔をして坂本の顔を見ると、坂本はニコニコと顔をしていた。

「なありユウ、今日はいい天気だな」

「そうですね……」

「こんな日は正しく訓練日和だな」

「そうですね……」

「ならばいっしょに飛行訓練でもするか？」

「すみませんがお断りします」

匙は坂本の誘いをきっぱり断った。坂本は匙の答えに啞然として、匙が立ち去ろうと「では」と動いた一瞬坂本は反応が遅れた、だがすぐに匙の行く手を阻んだ。

「まあ待て、お前が気にしているのはユニットの事だろう？分かってる、いつも通り一式陸攻で構わない。だから、な！やろう訓練」

匙は内心ため息をついていたが、そのようなことが顔には出ないように敬礼をし坂本の誘いを受けた。坂本の指示で匙は格納庫に来ていた。

「匙少尉、どうなされましたか？」

匙が格納庫に着くと、整備兵が駆け寄ってきた。

「これから坂本少佐と共に飛行訓練を行う。すぐに機体を飛べるようにしておけ！」

「「「了解しました！」「」」」

匙が指示すると、整備兵たちは一斉に機体の点検と確認に入った。

☆☆☆

宮藤が甲板の掃除をしていると、スピーカーから坂本の声が聞こえてきた。

『宮藤まだ甲板に居るのか？そこを動くな見せたいものがある』

「見せたいもの？」

坂本は通信を終えると、格納庫へと向かった。格納庫には点検等を終えたユニットと一式陸攻が用意されており、匙はすでに一式陸攻に搭乗していた。

坂本もユニットを装着すると犬耳と犬尻尾が現れ、九九式二〇耗機銃を武装するとエレベーター甲板まで移動した。それに続き匙も甲板へと移動した。

「坂本美緒、これより飛行訓練に入る」

「匙竜之介、同じく飛行訓練に入る」

二人のプロペラが回り始めると、足元には二重に重なる巨大な魔方陣が浮かびあがった。

二人は飛び立つと横に並ぶように並走し、右へ左へ旋回し、時には急上昇、急降下、急加速、急停止を行い宮藤や他の船員たちを魅了したのだった。そして訓練は何事もなく無事終了した。

「坂本さん！匙さん！すごかったです。すごくカッコよくて感動しちゃいました。あんな風に自由に空を飛べるなんてまるで鳥みたいでした」

「ハハハ！鳥か、だが私たちは鳥で在らず。青空を駆ける魔女と魔術師、ストライクウィッチーズ」

「ストライクウィッチーズ……」

宮藤は坂本の言葉を噛みしめ、そして二人のその姿に憧れに似た感情を抱いたのだっ

た。

「そしてこれが今の私達の籌ストライカーユニットだ。君の父、宮藤博士はこれを開発したんだ」

「お父さんがこれを!?!……あ、でも匙さんって魔女……じゃなかった魔術師なのに、このストライカーユニットって使ってなかったですよ。どうしてなんですか?」

「……宮藤、気持ちはわかるが個人的な問題にあまり突っ込むものではないぞ」

「す、すみません……」

匙の言葉に宮藤はシユンとしながら反省した。それを見た匙は少々呆れながら話を続けた。

「俺はストライカーユニットを使わないが変わりにこの一式陸攻を使っている。見た目は他の一式陸攻と変わらないが、これにもストライカーユニットと同じ様な技術が使われて俺専用の攻撃機となっていて、俺の唯一信用できる相棒だ。」

匙は一式陸攻に触れていた右手を離すと「ふう〜」と息を吐き、2、3歩その場から離れた。

「……それとな宮藤、話は変わるが俺たちの仕事は格好良くなってる。俺たちは今はネウロイという共通の敵がいるから、見せかけだけでも協力しているだけだ。もしもネウロイを根絶できたとしても戦争は無くなりはない。このユニットだっていつか

は人間同士が殺し合う為の道具に成り下がってしまった。人は、誰かを疑い、恨み、妬み、争い、奪う。原始時代から何も変わらずそれしか出来ない動物なんだ」

匙は空を見上げながら言った。その顔は何故か悲しげに微笑んでいた。宮藤は「そんな事は…」と匙の言葉に対抗しようとするがその時だった、坂本と匙は何かを感じたのか赤城が向かっている前方に顔を向け、坂本は眼帯を外すとその眼には魔眼がありそしてその眼線の先には、ネウロイが飛んでいた。

「敵襲うううううううう!!」

坂本の声は赤城中に響き赤城からは敵を知らせるサイレンが周辺に鳴り響くのだった。